

## [009]九州帝國大學農學部付屬演習林付近の地質

木下, 龜城  
九州帝国大学工学部

瀧本, 清  
九州帝国大学工学部

木下, 龜城  
九州帝国大学工学部

瀧本, 清  
九州帝国大学工学部

<https://doi.org/10.15017/14212>

---

出版情報 : 九州帝国大学農学部演習林報告. 9, pp.1-71, 1936-07-15. 九州大学農学部附属演習林  
バージョン :  
権利関係 :

## 緒 言

昭和十年夏九州帝國大學農學部附屬糟屋演習林附近の地質調査に従事せり。本文は七・八月兩月に亘る約三十日間の野外踏査の結果と、九月以降同年末に至る三ヶ月餘の研究室内に於ける採集岩石の顯微鏡的研究の結果とを纏めたるものなり。本調査に於ては其の力を特に演習林内に於ける地質の闡明に用ひ、演習林外の區域の調査は其の大要に留めたり。而して演習林中、荒平・飯盛・上ノ山・大倉・生ケ谷及び鬼ヶ浦の六團地は主として瀧本清之が調査に任じ、新建團地及び演習林外の地質は専ら木下龜城之が調査に當り、兩者の蒐集せる資料を整備して本篇を編めり。即ち踏査地域の面積に比し研究の時日は甚だ不足なるを免れず。従つて本文に於ては専ら岩石の分布の状態を究め、この地域の地質構造を明にせんことを旨とし、その理論的方面の考察は之を他日に譲らんとするものなり。

尙九州帝國大學農學部林學教室、就中糟屋演習林職員各位は、調査中一切の便宜を與へられたり。茲に誌して感銘の意を表はす。

昭和十一年一月

## 第一章 概 論

我が九州島は地形上南日本外帶の西端に屬する九州南部山系と、同内帶の西端を代表する筑紫山系との諸地塊とが、阿蘇・九重等の火山群によつて南北互に聯接せられたるものなり。この中筑紫山系は主として古生層及びそれを貫いて地下深く進入せる花崗岩より成る古き山地の殘骸が、多數の斷層によつて地塊化し、その一部には白堊紀層・古第三紀層・玄武岩及び安山岩質熔岩及び集塊岩を被りしまま、複雑に昇降傾斜せるものにして、九州北部に東西に列なる筑豊・背振・松浦の諸山塊を主軸とす。

而してその東端を占むる筑豊山塊は南日本一般の構造に従ひ、是又大體東北より西南に延びたる古生層及び中生層と、これを貫く花崗岩類とより成り、北々西より南々東に之を横切る斷層によつて數個の地壘と化し、東部山塊即ち福智山彙と西部山塊即ち三郡山彙の兩者に分たれ、その西端は福岡・太刀洗間の低地帯にて背振山塊と完全に分離し、ここに所謂筑紫の山門を形成す。是等のうち最高點たる三郡山にては海拔九百三十七米に達するも、他は概ね海拔五百米乃至八百米にして北に向つて次第に低下し、その北端は一度赤間より福岡を連ぬる低地に没し、更に北方に宗像山塊を分離す。余が今回の調査區域は前述の三郡山彙の一部にして、福岡より飯塚に至る國道と福岡より犬鳴峠を経て福丸に通ずる縣道との間に挟まれ、鞍手・糟屋の郡界を以て境せる略三角形の地域にして、西側は直ちに福岡平野に面すれども其間第三紀層よりなる低夷なる臺地ありて山塊の西側を縁どり、南に延びて糟屋・筑紫一帶の臺地に連れり。但し多々良川の支流たる金出川及び久原川はこの臺地の一部を削り去り、其の流域に狹長なる沖積原を作れり。即ち本調査區域は三郡山彙西側斜面の一部を主とし、之に加ふるに其の西側の平夷なる臺地及び金出・久原兩川流域の一部を以つてし、行政管轄上よりは福岡縣糟屋郡篠栗町・久原村及び勢門村の一町二村に跨り、九州帝國大學農學部附屬糟屋演習林の全部並に附近一帶の地域を包含す。

尙本調査に際しては下記の圖書を參考とせること尠からず。

1. 鈴木 敏 福岡縣豊前及筑前煤田地質圖 明治二十六年
2. 鈴木 敏 二十萬分一福岡圖幅及同説明書 明治二十七年
3. 小山一郎 筑前篠栗地方の地質（東京帝大卒業論文） 明治四十三年
4. 徳重英助 同 （ 同 ） 大正十年
5. 門倉三能 福岡縣糟屋郡の松岩及石炭に就て 地質學雜誌第二十一卷 第二百五十五號 大正三年
6. Takeo Kato: — A contribution to the knowledge of the Mesozoic igneous rocks developed around the Tsushima Basin, Japan. 地質學雜誌 第二十七卷 1—38 大正九年

7. 矢部長克 第三紀及其直後に於ける九州地史の大要 地理學評論第二卷  
第一號 大正十五年一月
8. 徳永重康 地質學上より研究したる福岡縣糟屋炭田 石炭時報第三十七  
號 昭和二年三月
9. 長尾 巧 福岡縣糟屋炭田の地質 筑豊石炭鑛業組合月報 第二十三卷  
第二百八十號 昭和二年十月
10. 長尾 巧 九州古第三紀層々序(其十八)(糟屋及福岡炭田) 地學雜誌  
第四十年第四百六十七號 昭和三年一月
11. 自在丸新十郎 篠栗地方の蛇紋岩に就きて 岩石礦物礦床學第九卷第四・  
五・六號 昭和八年四・五・六月
12. Shinji Yamane: — Physiographic change in the north-western coast of  
Kyushu in the Quaternary Period. Proceedings V. Pacific Sci. Cong.  
1933 vol. II. p. 1599
13. 岡本要八郎 福岡縣鑛物採集記 福岡博物學雜誌 第一卷三號及五號  
昭和九年十月及十年八月

茲に記して衷心感謝の意を表はす。

## 第二章 地 形

**三郡山塊の地形** 本調査區域は一の高原性地貌を有す。試に立つて鉾立山上より四望すれば本地域の地形手にとるが如く、峯巒連綿として深壑之れを刻み、一起一伏殆んどきわまり無きが如しと雖も、然も之を大觀すれば峯頂總て殆んど一平面内にありて、假に悉く其間の谷を埋めたりとすれば、全地域の表面は極めて徐々に西方に傾斜したる平原と化すべく、其狀譬へば耕せる農圃の如く、或は彼の大洋の表面が常に波浪の起伏するに任せつつも、之を全體として見れば坦々として鏡の如きに異ならず(第一圖)。更に轉じて此れが側面を姪ノ濱町西南の田園より望めば、約三百米より漸次東するに従つて六百米の高さを有する高臺にして、是れが北西に於ける延長